唐代ソグド城塞の發掘と出土文書

(Академия Наук СССР · Согдийский Сборник, Ленинград, 1934)

岩佐精一郎

隋唐の極東文化に及ぼせるソグド人の勢力影響の跡に關してはペリオ・ミュラー・桑原・羽田・石田諸先生の光彩に富んだ名篇に乏しくなく、又中世ソグディアナ地方の史的研究は、文獻よりする限り、トマシェク・マルクワルト・バルトリド・ギブ・大谷諸氏に加ふるに、特に我白鳥博士の雄作「粟特國考」一篇があつて、殆ど大成されたに幾い。然るにソグド本土に於ける文化の狀態は今日却つて不明であつて、寧ろ極東の文獻や、新疆に於ける其植民地の遺品等に照して間接に敎へられる狀態と云つて差支へないかと思ふ。又ソグドの歴史にしても、史料は概して漢史やアラブの記錄に求めるの外ないのであるから、勿論斷片的である憾みを免れ得ない。固より東トルキスタンの探檢調査によるソグド文書の發見はよく一千年の死語を復原せしめつゝあるけれども、不幸にして在來發表された分のそれは概ね佛典が主であつて、[1] 史料の用に適せぬのみならず、ゴーチオ氏が嘆じてゐた樣に、語學研究資料としても好箇とは云ひ難いのである。[2] 然るに一昨年末ソヴエト學士院派遣の探檢隊による唐代ソグド城塞發掘は此缺陷を補ふと共に、本土に於けるソグド文化の遺址調査の最初として、又其遺址・遺物特に文書の年代の明確なる點に於て、極めて注意すべきものがあると思はれる。

中央亞細亞のタヂキスタン共和國内で回鶻文或はソグド文書が一通出土したと云ふ報が露都に齎され、やがて文書のフォトグラフが同國首都スタリナバッドからレニングラードの學士院タヂキスタン部

に到着したのは一九三三年春であつた。A. A. Freiman 氏は此文書に對し、それが、ソグド文字ソグド語を使用してゐる事、其内容はサマルカンドに關係ある高位の人に宛てた書簡である事を確かめ、且つサマルカンドの高官が依然ソグド文を使用してゐる事よりして、其年代が少くもソグド國に於けるカリフ政權確立の八世紀半を下らず、又ソグド字體の進歩の程度から考へて、早くも七世紀中葉を出ないと判斷した。其出所は調査の結果、同國 Zakhmatabad 州 Khaïrabad 村に近く Zerafshan 河南岸に孤立する土名 Mug kal'a なる山上から、一九三二年春土民が柳製の編籠と共に發見した事が判り、A. I. Vasiliev 氏が調査に派遣された。氏が其處に到着するに先だち、前の發見に關係した一地方吏員が其遺蹟の小發掘を試みて廿通かの文書を出した。ワ氏も調査の結果廿一通の文書と遺物若干を獲、此遺址がソグドの古城址である事を確めた。そこで土民の盜掘と雨期の襲來とがある爲め、發掘隊の編成は即刻の急務となり、學士院より前記フ氏・ワ氏の外に V. A. Vorobiev 氏が加はり、一九三三年十月露都を出發して十一月八日から十五日間十人の人夫を使役して現地の發掘に從事し、その廿三日歸還の途に着いた。此短日月の期間に拘らず、出土品は四百點を數へたのである。

一九三四年九月に出た同學士院の東洋學研究所 (Institut Vostokovedeniya Akademii Nauk) 及タヂキスタン部 (Tadjikistanskaya Baza Akademii Nauk) の共刊に成る「ソグド專集。タヂキスタン共和國ムグ山發見のソグド語ソグド文化資料に關する論集」(Sogdiiskii Sbornik, Sbornik statei pamyatnikax sogdiiskogo yazyka i kultury naidennyx na Gore Mug v Tadjikskoi SSR, Leningrad, 1934, str. 121) は副題の如く右遺蹟調査關係者による發掘及發掘品の概報で、一種の Preliminary Report である。執

筆者のA. A. Freiman氏はイラン語學、I. Y. Krachkovskii 氏はアラビア學、同女史は特にその美術方面を專攻する錚々たる大家である。左に各々の論題を掲げる。

(一) 「タヂキスタンに於けるソグド文書と遺物の發見(豫報)」(pp. 11)……A. A. Freiman.

(二) 「ムグ山上のソグド城塞」(pp. 15)……A. I. Vasiliev.

(三) 「ムグ山發見のソグド文書に就いて」(pp. 19)……A. A. Freiman.

(四) 「中央亞細亞發見の最古のアラブ文書」(pp. 40)……I. Y. Krachkovskii & V. A. Krachkovskaya.

(五) 「タヂキスタン發見の支那文書」(pp. 27)……A. S. Polyakov.

(六) 摘要 (佛文) (pp. 4)

卷末の摘要は恐らく Freiman 氏の手に成るらしく、前記(一)を簡略にし、若干補筆が加はつたものゝやうである。前述の發掘までの經過は(一)に見え、一應の要領は(六)でも足りる。遺址の平面圖やソグド文書の一部、アラブ及支那文書各通は各圖版として卷中に挿入されてゐる。

先づ(二)のワシリエフ氏によつて、此遺蹟及び出土遺物のさまを見よう。以下はその摘錄である。

ムグ山はサマルカンドの正東約百二十粁の地で Zerafshan 河に其支流 Kum 河が合流する地點に位し、河面から約百五十米の高さで、三方が此兩河を以て圍まれ、南方背後の唯一の通路には別に丘を隔てゝゐる天險である。其山項に此城塞內の住居址と思はれる建築物が石壁となつて土に埋もれてゐる。此建物は元來上に煉瓦でドーム形の屋根があつたと思はれ、石壁は東西に並行して各二十七米と二米前後の矩形を成す四室を區切つてゐる。其城塞の西部には一の小丘があり、遺物は此建築物址と丘の土中

から出土したのである。

先づ其小丘には瓦器片・織物其他雜多の器具の破片や屑のみが出たのであつて、此處は瞭かに塵捨場であつたに相違ない。第一室は床下に羊類の排泄物の層があり、鉋屑・木片・木塊等の木細工の屑物しか出土してゐないから、恐らく家畜の飼養場であると共に、木匠の仕事場でゞもあつたらしい。第二室には壺・釜椀や皿の破片類から木製鋤・大量の灰や炭となつて殘つてゐる爐の跡等が南の部分に出で、大麥・豆・稷の種子や陶器や石臼が北隅に發見された。してみると此室は臺所であつたかと思はれる。第三室は殆ど空に等しかつた。纔かに瓦器破片とガラス罎の破片と櫛一箇が出たのであるから、此室の性質は明瞭でないが、日用家具の缺如から見ると、多分儀式用乃至宗教用ではないかと推測される。最後の一室は遺品最も豐富であつて、長靴・食器・貨幣（三箇中一箇は銀貨）・鏃・骰子・櫛・絹袋・小刀・短劍の鞘・編盆・衣服殘片・銅板・裝身金具等が數へられ、城塞主が日常居臥してゐた居間だつたのであらう。發見された文書類は、材料から云つて、紙・革紙・木の三種の區別があるが、紙及革紙の分は、第三室の北部と第四室に孤立して一通づゝ存する外は、悉く第三室南側約七米の範圍内に二層の煉瓦の間から發見された。恐らく之は文書保存室が此上の二階にあつたので、天井の陷沒と共に埋まつたものと考へられる。木の文書は凡て第四室から出てゐる。小丘の塵芥層や羊糞の層から推すと此城の維持期間は十年を出ないかと思ふ。

遺物は總計三百餘點であるが、材料別にすると、瓦器・木製品・革製品・織物・金屬器等に大別される。瓦器・木器・革製品は手法からも材料からも、概して當地の製品で、此種の手工業が行はれてゐた證據になる。織物では金襴や絹もあるが、毛織物や木棉製品が大部分で、其原料品も出てゐる。家畜飼

養の痕跡などから見て牧畜の行はれてゐた事が瞭かである。同時に農具や種子の存在は此地の農業生活を語るものであるし、又別に櫻・杏・桃等の果實の核とか、林檎・葡萄の房等の殘餘が見出される所から云ふと、此種の果樹栽培も行はれてゐたらしい。[8] なほ注意すべきは武裝である。出土した木製の楯に革の上張りがあつて、之に一騎士の彩色畫がある。不幸にして首尾を缺いてゐるが、なほ左帶に直刀、右帶に短劍を帶び、箙を右にし、弓二張を左にし、外套を着けて鞍馬に跨つた中世ソグド戰士の面影を髣髴出來る。發見された銅薄片は甲冑の一部らしい。箭は殊に多く出てゐる。其型は三種に區別出來るが、中には弩に使用されたらしいものもある。

以上の遺物中特に興味を喚起するものとして極東よりの輸入品がある。即ち第二室や小丘から出た竹細工品や漆器の斷片等が是であつて、後者には明白に支那風な繪畫が描かれてゐる。又方孔錢がある事も其影響と認められる。[4] 今一つ注目すべきは貨幣中の一箇にソグド字ならざる古突厥文字と同系統のルニック文字が刻されてゐる事である。[5] 此言語は未だ解讀されないのであるが、ソグド地方の土着文化を代表するものとして注意しなければならぬ。

以上はワシリエフ氏の所說の一端である。其詳細が發表されたなら、一層興味多い數々の事實に接し得ると思ふ。不幸此論文は未だ具體的な遺品の記述に及ばぬのみならず、一箇の圖版もない爲めに、廬山の面目を窺ふ事を得ない。他日に於て其詳細が判るであらう。

ブレイマン氏は(一)の後半に於て出土文書を概說し、(三)に於てソグド文書の略目を掲げてゐる。先づ出土文書に紙・革紙・木の別がある事は前に云つた如くであるが、其總計は斷簡共に八十一あり、紙が廿五(廿通分)、木が廿三、殘餘は總て革紙である。但し此八十一通中、革紙一通丈けは小刀の鞘に卷か

れて、貼つてある爲め、未だ調査不能であるから、發表出來る分は八十通である。之を文字によつて分つと四種ある。第一に支那文書であつて三通あり、八片に切れてゐる。何れも紙を使用してゐるが斷簡で完好なものは存しない。第二にアラブ文書で一通しかない。之は二片に切れた革紙である。殘餘は唯一つを除くと全部ソグド文書であつて、其内分けは、紙廿二（但し此中五片は支那文書、後記の地籍斷簡を流用してゐる）、革紙廿九、木廿三を數へる。除かれた一通（革紙）と云ふのはルニック體の古突厥文字らしいが、未だ何語とも判讀出來てゐない。[5]

紙は其質から云つても、後記のボ氏の研究による支那文書の内容から云つても、支那からの輸入品に相違ない。[6] 又革紙については二種類の印章の存在が注意される。三つは赤色粘土（？）製で駱駝を圖象し、一は白色物質で一人物（剪髪、イラン人型）のプロフィルを描き出してゐる。其横には五字乃至六字の文字も打出してあるが、未だ讀む事が出來ぬ。前者の印はソグド文書21. B 18に別々に二個、同24. A 2に一箇あり、前文書では文書を括る紙紐が印を貫通してをり、後文書でも革紐がやはり印の中を通つてゐて、寸法は 1×0.5cm である。共に後述のDyvāstyčなる者の書簡であるから彼の印章と思はれる。後者の印はソグド文書5. B 4の文字の首行中央の上部に於て革紐に付いてゐて、其書簡はDyvāstyčに宛てられたものである。木の文書と云ふのは、新疆に普通な木簡其他のタブレットは一もなく、全部柳枝の樹皮を除いて作つた棒であつて、大小區々、長さ一米卅糎、直徑六糎に亙るものもあり、僅か十糎の長さしかないのもある。此棒が此地方に於ける最も普通の文書形式であつたらしい。

ソグド文書は總て書簡であつて、而もそれは大部分ソグド王・サマルカンドの主Dyvāstyčに宛てゝあるか、乃至彼から發信されてゐるか何れかの文書

である。此文書で最も注意すべきは此ソグド王の稱號で、Sywdyk MLK' Sm'rkndē MR'Y dyw'styč(ソグドの王、サマルカンドのMR'Yなる Dyvāstyč)とある。然るに Tabarī によると、開元時代サマルカンドの主でソグド王であつた Ghūrek(唐史の烏勒)はソグド王(ikhshide)、サマルカンド主(afshin)の稱を冠してゐる事によつて MR'Y とは afshin に相當する語である事が判る。(白鳥博士は紹介者に對し、MLK' は卽ちアラブ語の Melik[king]であり、MR'Y は Emīr[Commander, Governor]乃至其複數形の Ūmerā と關係あるべき旨の御教示を給はつた。然らば此稱號は一層重要な歷史的意義を持つものである)。

アラブ文書一通に對するクラチュコウスキー氏及同女史の研究は最も詳密な力作であつて、恐らく次のポリャコフ氏のそれと共に最後的報告であると思はれる。第一節に文書の名宛、日附等を調べ、次にテキストと其譯註を加へ、第三節に文書中に見ゆる人物を比定し、四節にテキストの形式を考へ、五節に文書の歷史的意義を論じ、六節に文書の材料と形式とを瞭かにし、最後に字體の問題に論及してゐる。卽ち此文書の發信者は Dīvāstī とあつて、之は瞭かにソグド文書に見えるソグド王 Dyvāstyč のアラブ語形に相違ない。受信者はカリフの Omar 二世に任命されて A. H. 99–100 (A. D. 718–719) の間、ホラサンの執政であつた Al-Djarrah である。從つて此文書の年代は彼の在任中卽ち唐では開元六・七年の間に相當する譯である。それ故、書簡中に Tarkhun の子等云々とある Tarkhun はソグド文書の trywn と同じく Ghūrek の前に開元初迄ソグド王だつた Tarkhun (唐史の突昏)でなければならない。然らば發信者たる Dyvāstyč (Dīvāstī) とは何者であらうか。當時のソグド王・サマルカンドの主は Ghūrek 其人であるが、Dyvāstyč とは名稱の一致を

見なし。そこでク氏は Tabarī に見える當時のソグド貴族 (dihqān) の一人で、七二二年、大食の Khujanda 經略に際し、Abghar に築城して反抗し、後に Kūm 村に於てアラブ軍と戰ひ、村から程近い一城に於て捕虜となつたと傳へられる Dīvāstī が彼であると擬定し、從つて、彼の最後の古戰場 Kum 村は Kum 河畔にあり、捕へられた一城こそ Kum 河口の此ムグ山古城であると斷じ、彼が捕虜となつて後其文書が此城に殘つたのであると考へてゐる、但しソグドの dihqān たる Dīvāstī が何故ソグド王・サマルカンド主なる稱號を帶びたのであるかは、同氏の研究では未だ說明し得ない所である。[7] が兎に角其年代が確定してみると、之は古さに於て A. H. 90~96 年前後と推定される埃及發見のアラブ語のパピルス文書に比肩するものであり、之との對照によつて用語の解釋に資せられる事が少なくない。其の內容も其物が政治史的に貴重な資料である外、例へば Dīvāstī が自ら回教徒なる事をアラブの Al-Djarrah に表明してゐるのは Omar 二世 (717~720 A. D.) の初年、ソグド王 Ghūrek が政略上回教歸依を裝つた事實と相應せしめて考ふべきであり、又文中に見える Emir Al-Djarrah なる稱號は Ghūrek の唐朝への上表中に Quteiba を指して異密屈底波と呼べると（冊府元龜卷九九九）同樣な譯である。文體雅馴、よくイスラム教の公文法式に適へるはアラブとの交涉の爲に、此方面に熟達した書記を Dīvāstī が有してゐた爲めと考へられると云ふ。

最後にポリャコフ氏が整理解說した支那文書は三通あつて、氏は各々の譯讀をなし、之に加へて其中に出る官名地名を別章に詳細に說明してゐる。第一文書は中宗神龍二年 (706 A. D.) の牒の一部である。

（前闕）

訪察前置監軍御史者宜　下闕

神龍二年閏正□　十四(?)□

都司　　牒伍澗

交城守捉使　大斗守捉使

牒被　勅監覆倉庫兼訪察諸州軍使牒稱檢

案内被　勅訪察諸州軍使牒稱得東都右御史

(盞牒)

□□得吏部牒稱奉　勅旨如右牒至准

(以下闕)

第二は地籍(ポ氏は田畝四界冊と稱する)らしきもの丶斷片であつて五片に切れ、紙背にソグド文字が書かれてゐると云ふ。各片を繋いで見ると左の如き三行である。

(前　闕)

一段伍畝　村西　□□　東吳敏　西李□□(?)

北李平

一段貳畝　□□歩　東吳緒　西楊通(?)　南馬達

北宋恭

上闕　東張□　下闕(?ある字は紹介者が寫眞版から意を以て加へし所)

第三文書は貸借文書で二片になつてゐる。

同保人寧□□

同保人周(?)藏□(ポ氏闕に作れど圖版では周の樣である)

(同保)

□□人李師仁

同保人歐敬之

斯くの如く第一文書が公文書の一例として相當注意すべき外、(8)爾餘は自身としては單に此種文書の類例を增した丈けに止まるであらう。寧ろ興味ある事はかゝる支那文書がソグヂアナの古城址に存在した事になければならぬ。大斗守捉・交城守捉は共に凉州西二百里にあると云ひ(通典・元和郡縣圖志)、伍澗は水經注以來水名として現はれる凉州の地名であるから、第一文書が唐の河西地方の文書である事はポ氏が考證した所であるし、地籍や債務文書も其關係地は不明であるけれども、到底ソグヂアナに關係がある樣には見られない。從つて此三文書は支那からソグドの地に將來されたものでなければならぬ。其過程としては、漢人の旅行者が携帶したものか、紙の材料と

して輸入されたかと考へられるが、紙背にソグド字のある事などから見て、後者の見解が妥當であるとポ氏は論じてゐる。何れにしても、ソグドの地に於て七〇六年附の支那文書が七一八年前後のソグド・アラブ文書と伴出する事は興味深い事實と云はねばならぬ。

以上五論文、述ぶる所に繁簡あり、そこに提出された幾多の問題の解決には未だ距離があるとしても、兎に角八世紀初頭のソグドの遺蹟に支那・アラブ・乃至突厥系、諸文化の反映が窺はれる事は當然とは云へ史的意義の深いものがある。筆者の杜撰粗漏なる紹介文には多々誤解と不學とを表明してゐる事であらう。罪を編著者及讀者諸彦に獲ん事を切に怖れてゐる次第である。

補註

(1) 但し最近 Stein 將來の分に於ては、佛典以外の文書若干が發表されて幾分從來の缺陷を補つてゐる。

Reichelt, H.; Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums. II. Teile: Die nichtbuddhistischen Texte. Heidelberg. 1931.

(2) Gauthiot, R.; A Propos de la datation en Sogdien. JRAS. 1912. p. 341.

(3) 以上の記事によつて讀者が徑ちに氣付かれる樣に、上述の出土品が漢史に見えた康國乃至其附近の土風物產に合致を見る事は興味ある事と思ふ。例へば後漢書粟弋國の傳に「出名馬牛羊蒲萄果」とあり、隋書康國條に「氣候溫、宜五穀、勸脩園蔬、樹木滋茂、出馬駝騾犛牛……氎氎錦疊、多蒲桃酒」と云ひ、玄奘が「國土沃穰、稼穡備植、林樹蓊鬱、花果滋茂」、慧超が「土地出駝騾羊馬疊布之類」と說き、康國の黃桃は「其色黃金、亦呼爲金桃」（冊府元龜卷九七〇）とせらるゝ如き之である。

(4) 此の方孔錢が支那錢なりやソグド錢なりやは文意明白で無いが、多分支那錢の事ではない樣に見受けられる。從來の西域出土の方孔錢としては支那錢の外に高昌吉利錢や開元時代の突騎施錢、回鶻西徙後の回鶻錢等が知られてゐる（羽田博士「西域文明史概論」、「トルコ族と佛敎」等による）。

(5) A. A. Diakov 氏は一九二七年伊犂の Kouldja 東北でチベット錢と共にトルコ文字を刻せる銅錢及び銀貨（deux pièces de monnaie, l'une de cuivre, l'autre d'argent, avec des inscriptions "turques"）を獲た旨を報じてゐる（Découv-

erte drs ruines d'une cité ancienne dans le district d'Ili. Rocznik Orjentalistyczny, Vol. V. 1929, p. 104-5)。所謂 inscripfons "turques" を突厥文字と推定して差支へなければ、突厥文字の貨幣なるものは別にも發見されてゐる譯である。なほ寡聞の及ぶ所では從來の純然たる古突厥文字の遺品として西トルキスタンではタラス渓谷の墳墓に於て一八九八年芬蘭探險隊の將來したものがある丈けの樣である(Verhandlungen des XIII. Internationalen Orientalisten-Kongresse, Leiden, 1904. S. 159)。

(6) 東トルキスタンでは五世紀末には略ゝ革紙が廢れ、紙が普及したと云ふ事情に對し、又七世紀中頃には回教國にも支那紙の輸入が始まつたと云ふ所傳、乃至八世紀中葉サマルカンドに製紙工業の起つた事實等に對し、八世紀初葉と見られるソグド遺蹟中、支那紙が革紙との間に混在してゐる事は示唆淺からぬものがある。

(7) 唐の史籍で武后の萬歳通天(696 A. D.)中朝貢したと傳へられる康國大首領乃至康國王鴦娑鉢提や、開元十四年(726 A. D.)朝貢の安國王鴦薩波提は恐らく第二・第三字に轉倒があつて、本來 Dyvāsṭyč の音譯と認めてよいかと思ふ。Marquart 氏は後者に對し Tabarī の Tygshada を充てゝゐるけれども(Ērānšar)史的事實からも音譯からも共に信憑出來ないやうである。本文書の Dyvāsṭyč が此兩人の何れにも適合しない事は云ふ迄もないが、彼が果して烏勒でないか否かは、ク氏も云つてゐる樣に、ソグド文書全部を研究して見た曉に於て更に考慮すべき問題であらう。

(9) 因みに交城・大斗兩守捉の建置年代は從來の史料では知られてゐない。否軍・城と並稱される邊戍機關としての守捉の名が信憑し得る限りに於て開元以前に溯り求める事が出來ない(通典・唐會要參照)。本文書は守捉が神龍年間には既に存置してゐた明白な證據を提供する。

〔附記〕 本著に關する明快要を得た紹介は既に江上波夫學士が試みられた所であつて(「東亞」本年二月號所載「蘇聯邦近時の東洋學關係文獻覺書」)、粗漏なる本紹介の如きは殆ど無用に庶いのであるが、たゞ本著の流布は我國には比較的尠かるべきを思ひ幾分具體的な一斑を傳へんとした迄である。